

目次

イントロダクション	1
はじめに	1
1. 聖書フォーラム運動の広がり	1
2. ヤコブの手紙は、極めてヘブル的なものである.....	1
3. ヤコブの手紙に関する論争	2
4. ヤコブの手紙は、書簡というよりは、説教である.....	2
5. 著者（新約聖書に登場する4人のヤコブ）	2
6. 執筆年代.....	3
I. 忍耐深い信仰（1章）.....	5
A. あいさつ（1：1）.....	5
1. 1節	5
B. 試練と誘惑（1：2～18）.....	6
1. 2節	6
2. 3～4節	7
3. 5節	8
4. 6～8節	8
5. 9～11節.....	9
6. 12節.....	10
7. 13～15節.....	11
8. 16節.....	12
9. 17節.....	12
10. 18節.....	13
C. みことばを聞くことと、実行すること（1：19～27）.....	13
1. 19～20節.....	13
2. 21節.....	14
3. 22～24節.....	15
4. 25節.....	16
5. 26～27節.....	16
II. 憐れみに富んだ奉仕（2章）.....	19
A. えこひいきの罪（2：1～13）.....	19
1. 1節	19
2. 2～4節	20
3. 5～7節	20
4. 8～9節	21
5. 10～11節.....	22
6. 12～13節.....	22
B. 行いのない信仰（2：14～26）.....	23
1. 14節.....	23

2. 15～17節.....	24
3. 18～20節.....	25
4. 21～24節.....	25
5. 25～26節.....	26
Ⅲ. 舌の管理 (3章)	29
A. 舌の制御 (3:1～12)	29
1. 1節	29
2. 2節	30
3. 3～5節 a	30
4. 5b～6節	31
5. 7～8節	32
6. 9～12節	33
B. 上からの知恵 (3:13～18)	34
1. 13節	34
2. 14～16節.....	34
3. 17～18節.....	35
Ⅳ. 悔い改めを伴った従順 (4章)	37
A. 世的生活への警告 (4:1～12)	37
1. 1節	37
2. 2～3節	37
3. 4～5節	38
4. 6～10節.....	39
6. 11～12節.....	40
B. 明日に関する大言壮語 (4:13～17)	40
1. 13～14節.....	40
2. 15～17節.....	41
Ⅴ. 配慮ある分かち合い (5章)	43
A. 金持ちへの警告 (5:1～6)	43
1. 1節	43
2. 2～6節	43
B. 苦難と忍耐 (5:7～12)	44
1. 7～9節	44
2. 10～11節.....	45
3. 12節	45
C. 信仰の祈り (5:13～20)	46
1. 13節	46
2. 14～16節.....	46
3. 17～18節.....	47
4. 19～20節.....	47

イントロダクション

はじめに

1. 聖書フォーラム運動の広がり

- (1) 聖書は靈感を受けて書かれた誤りなき「神のことば」である。
 - ①字義通りの解釈＝ヘブリス聖書解釈
 - ②イスラエルの役割の聖書的理解
 - ③終末論の重視

- (2) 神学的理解の深まりと平行して、行動が変化する必要がある。
 - ①理解と行いは、クリスチャン生活の両輪である。
 - ②聖化の実は、行いによって証明される。
 - ③このことを意識しながら、ヤコブの手紙を学ぶ。

2. ヤコブの手紙は、極めてヘブリス的なものである

- (1) ヘブリス人クリスチャンが同胞のヘブリス人クリスチャンに書き送ったものである。
 - ①旧約聖書やユダヤ教の知識があることを前提に書かれている。
 - ②預言書のような権威がある。
 - ③詩篇のような美しさがある。

- (2) この手紙に出て来るヘブリス的言葉使い
 - ①「初穂」(1:18) — レビ記 23:10 参照
 - ②「会堂」(シナゴグ) (2:2)
 - ③「私たちの父アブラハム」(2:21)
 - ④「ゲヘナ」(3:6)
 - ⑤「万軍の主」(5:4) — 1サムエル 1:3 参照
 - ⑥「秋の雨や春の雨」(5:7) — 申命記 11:14 参照

- (3) 主イエスの山上の垂訓との関連性が見出せる。

3. ヤコブの手紙に関する論争

(1) 信仰義認を主張したルターは、この手紙を「わらの手紙」と呼んだ。

- ①しかし、これは誤解に基づく批判である。
- ②パウロは、救いに至る信仰とは何かを教えた。
- ③ヤコブは、救いに至る信仰とはなんでないかを教えた。

(2) 一般書簡は、パウロ書簡の教えを補完している。

- ①パウロは、信仰を強調した。
- ②ペテロは、希望を強調した。
- ③ヨハネは、愛を強調した。
- ④ユダは、聖さを強調した。
- ⑤ヤコブは、行いを強調した。

*ヤコブの手紙は、倫理的であり、実践的である。

4. ヤコブの手紙は、書簡というよりは、説教である

(1) その理由

- ①挨拶文で始まるが、個人名が登場しない。
 - *特定の教会や個人に宛てられたものではない。
- ②通常の手紙は、頌栄で締めくくられるが、そうはなっていない。
- ③この手紙は、公の集会で読まれることを想定して書かれたものである。

5. 著者（新約聖書に登場する4人のヤコブ）

(1) ゼベダイの子ヤコブ

- ①彼は、ヨハネの兄である（マコ1:19）。
- ②彼は、この手紙が書かれる前にヘロデ・アグリッパによって殺された（使12:2）。

(2) アルパヨの子ヤコブ（マコ3:18）

- ①ほとんど情報のないこの人物が、ヤコブの手紙の著者である可能性は低い。
- ②カトリック教会の見解
 - *アルパヨの子ヤコブは、主の兄弟ヤコブと同一人物である。
 - *アルパヨは、聖母マリアの姉妹であるマリアと結婚し、ヤコブが生まれた。
 - *イエスとヤコブは、従兄弟同士に当たる。
 - *それゆえ、主の兄弟ヤコブというのは、主の従兄弟ヤコブである。
 - *これは、聖母マリアの処女性を擁護するための見解である。
- ③カトリック教会の見解は間違っている。
 - *「兄弟」という言葉を字義通りに解釈していない。

- * イエス誕生後、ヨセフとマリアは通常の結婚生活を開始した（マタ 1：25）。
- * マリアは、複数の息子と娘たちを産んだ。

「この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。妹たちもみな私たちといっしょにいるではありませんか。とすると、いったいこの人は、これらのものをどこから得たのでしょうか」（マタ 13：55～56）

(3) ユダの父ヤコブ

- ① ルカ 6：16 に、「ヤコブの子ユダ」とある。
- ② このユダは、イスカリオテのユダではない。
- ③ このヤコブは、初代教会では、重要人物と見做されていない。

(4) 主の兄弟ヤコブ

- ① 初代教会では、リーダーのひとりで見做されていた。

「しかし、主の兄弟ヤコブは別として、ほかの使徒にはだれにも会いませんでした」（ガラ 1：19）

6. 執筆年代

- (1) ヨセフスは、ヤコブが石打の刑に会って殉教の死を遂げたと記している。
 - ① ヤコブは、A.D.62年に殉教の死を遂げた。
 - ② この手紙には、A.D.49年のエルサレム会議に関する言及がない。
 - ③ この手紙は、A.D.45年～48年の間に執筆されたと思われる。
- (2) ローマ人への手紙が書かれる前に、ヤコブの手紙が書かれた。
 - ① ヤコブは、信仰義認を否定するためのこの手紙を書いたわけではない。
 - ② パウロとヤコブの間には、信頼関係が存在していた。

7. アウトライン

I. 忍耐深い信仰（1章）

- A. あいさつ（1：1）
- B. 試練と誘惑（1：2～18）
- C. みことばを聞くことと、実行すること（1：19～27）

II. 憐れみに富んだ奉仕（2章）

- A. えこひいきの罪 (2:1 ~ 13)
- B. 行いのない信仰 (2:14 ~ 26)

Ⅲ. 舌の管理 (3章)

- A. 舌の制御 (3:1 ~ 12)
- B. 上からの知恵 (3:13 ~ 18)

Ⅳ. 悔い改めを伴った従順 (4章)

- A. 世的生活への警告 (4:1 ~ 12)
- B. 明日に関する大言壮語 (4:13 ~ 17)

Ⅴ. 配慮ある分かち合い (5章)

- A. 金持ちへの警告 (5:1 ~ 6)
- B. 苦難と忍耐 (5:7 ~ 12)
- C. 信仰の祈り (5:13 ~ 20)

I. 忍耐深い信仰 (1章)

A. あいさつ (1:1)

1. 1節

1.1 神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、国外に散っている十二の部族へあいさつを送ります。

(1) 著者

- ①著者は、主イエスの弟ヤコブである。
 - * イエスとヤコブは、ともに母マリヤから誕生した。
 - * ヨセフはイエスにとっては義父であり、ヤコブにとっては実父である。
 - * 英語訳は、「James」である。
 - * 欽定訳 (KJV) を命令したイングランド王ジェームズ 1 世の影響か。
- ②「神と主イエス・キリストのしもべ」
 - * 二重の意味で自分を「しもべ」と呼んでいる。
 - * 「神のしもべ」であり、同時に、「主イエス・キリストのしもべ」である。
 - * 彼は、キリストの神性を認めている。
 - * 主イエスとの肉体的つながりではなく、霊的つながりを強調している。
 - * 教会内でのタイトルに言及していない。
 - * 彼は、信徒の間でよく知られていた。つまり、この書簡を書く権威があった。
- ③「しもべ」は、ローマ的概念からすると非常に地位の低い存在である。
 - * ヤコブは、この言葉をヘブル的に用いている。
 - * 「しもべ」(デューロス) は自発的奴隷、神の権威によって派遣された者である。
- ④ヤコブは、使徒とも呼ばれた (ガラ 1:19 参照)。
 - * 主イエスの直接の弟子たちを 12 使徒と呼ぶが、第 2 分類の使徒たちもいた。
 - * 主の復活を目撃したパウロ、バルナバ、ヤコブがそうである。
- ⑤ヤコブは、主イエスの公生涯の期間、信者とはならなかった。
 - * 主イエスの復活を目撃してから、信者となった。
 - (ヨハ 7:5、1 コリ 15:7、使 1:14、ガラ 1:19 参照)
- ⑥彼は、エルサレム教会で指導的な地位に就いた。
 - (使 12:17、15:13、21:18、ガラ 2:9、12 参照)

- * 4世紀の教父エウセビオスは、彼のことを「義人ヤコブ」と呼んだ。
- * ヤコブは、「義人」としてよく知られていたようである。

(2) 宛先

- ①宛先は、各地に離散したヘブル人クリスチャンである。
- ②「国外に散っている12の部族へ」
 - * 英語では、「the twelve tribes in the Dispersion」である。
 - * 「離散」は、ギリシア語で「ディアスポラ」である。
 - * 新約聖書では、ここ以外にヨハネ7:35と1ペテロ1:1に出てくる。
 - * これは、テクニカルターム（専門用語）である。
 - * 捕囚の時代以来、彼らは離散の地に住むようになった。
- ③離散したユダヤ人たちは、自分がどの部族出身であるかを知っていた。
 - * イスラエルの12部族は、決して失われてはいない。
 - * 黙示録7:5～8に再登場する。
- ④比喩的解釈によって、ローマ帝国に離散した異邦人教会と解釈する人もいる。
 - * しかし、字義通りに解釈する方が自然である。

(3) ヤコブは、離散したヘブル人信者たちを励ますためにこの手紙を書いた。

- ①この手紙のテーマは、「聞くこと」ではなく「行うこと」である。
- ②「教理」ではなく「行い」である。

B. 試練と誘惑 (1:2～18)

1. 2節

² 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。

(1) 「私の兄弟たち」

- ①親密な呼びかけの言葉である。
- ②ヤコブは、上から目線で命令しているのではない。

(2) 「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい」

- ①ギリシア語の「ペイラスモス」という言葉には、2つの意味がある。
 - * 外側からやって来る試練と内側からやって来る誘惑
- ②この箇所では、最初の意味（外側からの試練）でこの言葉が使われている。
- ③クリスチャン生活には、さまざまな種類の試練がやって来る。

- *それは、予期せぬ形でやって来る。
 - *それは、避けることのできないものである。
 - *それを、罰、呪い、悲劇などと考えるべきではない。
 - *試練の意味を軽視する信仰は、聖書の信仰ではない。
- ④試練そのものを喜べというのではない。
- *試練の中にあって喜べというのである。
 - *つまり、試練を喜びの土台とせよというのである。

(3) この教えは、主イエスの教えとも合致している。

- 10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。
- 11 わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。
- 12 喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。(マタ 5:10～11)

①ヤコブが山上の垂訓を聞いた可能性は、大いにある。

2. 3～4節

- ³ 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。
- ⁴ その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。

(1) なぜ試練を喜びとすることができるのか。

- ①試練は、私たちの信仰を試す。
- *この信仰は、救いをもたらす信仰のことである。
- ②私たちの信仰は、金が精錬されるように精錬される。
- *信仰は、生きて働くものでなければならない。
- ③外からやって来る試練は、信仰を試し、私たちの内に忍耐を生み出してくれる。
- ④その忍耐を働かせるなら、私たちは、クリスチャンとして成熟した者となる。

(2) 神の視点から試練を見る。

- ①試練には、私たちを成熟へと導く役割が与えられている。
- ②試練そのものは決して喜べるようなものではない。
- ③しかし、試練が最終的にもたらすものは、忍耐であり、信仰の成熟である。

④試練の中に意味を見出す人は、試練に打ち勝つことができる。

* 試練は、神から見捨てられたしるしではない。

* 神は、私たちが愛し、訓練しておられるのだ。

3. 5 節

5 あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。

(1) 知恵を求めよ

①ヤコブは、知恵によって試練を乗り越えるように助言している。

* ヘブル 4：16 は、「神の恵みによって試練を乗り越える」ように教えている。

* ヤコブはその神の恵みの中でも特に「知恵」を強調している。

* 知識と知恵は、ともに必要なものである。

②知恵というのは、単なる霊的洞察力のことではない。

③「**実際生活において義なる行為を実践するために必要とされるもの**」である。

(2) 知恵に欠けた人がいるなら、知恵が与えられるように神に願えばよい。

①より正確には、神に願い続けるということである。

②これは、単なる助言ではなく、命令である。

③神は、だれにでも惜しげなく与えてくださるので、この願いは必ず聞かれる。

④祈りは、祈ったとおりに聞かれる場合もあれば、そうでない場合もある。

⑤この祈りは、「必ず聞かれるという約束を伴った祈り」なので、必ず聞かれる。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます」(マタ 7：7)

⑥神がこの祈りを聞いてくださる理由は、私たちが祝福し、私たちに良きものをもたらすためである。

⑦神は、私たちがとがめるようなことはなさない。

* 過去の不信仰や失敗を取り上げて、知恵を制限するようなことはなさない。

4. 6～8 節

6 ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。

7 そういう人は、主から何かをいただけるとってはなりません。

8 そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。

(1) 警告の言葉

- ① 「少しも疑わずに、信じて願いなさい」
(マタ 21 : 21 ~ 22、マコ 11 : 23 ~ 24 のイエスの教え参照)
- ② 疑う人は、風に吹かれて揺れ動く海の大波のようである。
* 海の水は、水平に、また垂直に揺れ動く。
* 疑う人もそれと同じで、左右に、また上下に揺さぶられる。
- ③ 疑う人は、「二心のある人」である。
* 信仰の世界と不信仰の世界に二股をかけている人である。
(詩 12 : 2、119 : 113 参照)
- ④ そのような人の霊的生活には一貫性がない。
- ⑤ そのような人の祈りは、神に聞き届けられない。

5. 9 ~ 11 節

9 貧しい境遇にある兄弟は、自分の高い身分を誇りとしなさい。

10 富んでいる人は、自分が低くされることに誇りを持ちなさい。なぜなら、富んでいる人は、草の花のように過ぎ去って行くからです。

11 太陽が熱風を伴って上って来ると、草を枯らしてしまいます。すると、その花は落ち、美しい姿は滅びます。同じように、富んでいる人も、働きの最中に消えて行くのです。

(1) 貧しい者たちへ

- ① ヤコブは、試練と社会的身分の関係をとり上げている。
- ② 貧しいことは、人生における試練の一つである。
- ③ 経済的に貧しい人は、普通、社会的にもさげすまれている。
- ④ 貧しい人は、高い身分を与えられていることを誇るべきである。
* 信者は、キリストにあって高い身分を与えられている。
- ⑤ 神は、物質的豊かさによってではなく、内的な信仰によって人を救われる。
- ⑥ 神は、私たちの信仰を試すために、私たちを貧しい状態に置かれることがある。
* 信仰があれば経済的に必ず祝されるというのは間違いである。
* 貧しさを経験することによって、多くの教訓を学ぶことができる。

(2) 富んでいる者たちへ

- ① 貧しいことが試練であるように、富んでいることもまた試練となり得る。
- ② 神は、ある人たちを富ませることによって、その人の信仰を試される。

- ③富んでいる者は、富は救いを買取ることができないことを知るべきである。
 *キリストを救い主として信じるためには、魂が砕かれる必要がある。
 *金持ちにとっては、謙遜になることは極めて難しいことである。
- ④富んでいる者は、金銭ではなく、低くされたということを誇るべきである。
 *富は、はかなくて、頼りにならないものである。
 *富む者の姿は、聖書の地に生える草花とそっくりである。
 *春から初夏にかけて咲く花は、砂漠からの熱風によって瞬時に枯れてしまう。
 *そのように、この世の富も瞬く間に消えていく。

『呼ばわれ』と言う者の声がする。私は、『何と呼ばわりましょう』と答えた。『すべての人は草、その栄光は、みな野の花のようだ。【主】のいぶきがその上に吹くと、草は枯れ、花はしぼむ。まことに、民は草だ。草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことは永遠に立つ』(イザ 40:6~8)

- (3) 貧しい者も富んでいる者も、同じ方法で神に近づくしかない。
- ①貧しさも豊かさも、ともに私たちの信仰を試す試練である。
 ②信仰による応答だけが、神を喜ばせる。

6. 12節

12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

- (1) 試練と報奨(ごほうび)の関係
- ① 1:2~11まででヤコブは、外側からやって来る試練について論じてきた。
 ② 12節では、試練に耐えた人に約束されている2つの祝福について語っている。
 *地上生涯で経験する祝福と死後の世界で与えられる祝福
 ③クリスチャン生活の希望は、この2つの祝福を得ることにある。
- (2) 「試練に耐える人は幸いです」
- ①地上生涯で経験する祝福とは、「内的に味わう幸せ」のことである。
 ②「幸い」とは「神にある幸いな立場」のことである。
 ③その立場にある人は、必然的に内面的な平安を味わうようになる。
 ④その内的平安は、外的な状況によって左右されるものではない。
 ⑤この平安は、神を信頼するところから来る平安(幸い)である。
 *これと同じことを、主イエスもまた教えておられる(マタ5:1~12)。

(3) 「いのちの冠を受けるからです」

- ①死後の世界で与えられる祝福とは、「いのちの冠」のことである。
- ②この冠は、王なるキリストが被る王冠とは異なる。
- ③これは、患難に勝利した者に与えられる冠である。
 - * 黙示録 2：10 では、「いのちの冠」は殉教者に与えられている。
 - * この冠は、殉教者以外にも与えられるものである。
- ④患難という試練に耐え抜いた者には、この冠を受ける資格がある。
- ⑤この冠は、千年王国における地位を決めるものとなる（奉仕のための地位）。
- ⑥神が下さる祝福や冠を得るために、信仰生活に励むことは、良いことである。

7. 13～15節

- 13 だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、とってははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。
- 14 人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。
- 15 欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。

(1) ここから話題は、誘惑に移る。

- ①誘惑（ペイラスモス）には 2 つの意味がある。
 - * 試練（外側からやって来る攻撃）と誘惑（内側からやって来る攻撃）
- ②この箇所では、ヤコブは第 2 の意味の「誘惑」を取り上げている。

(2) 神は、誘惑の源ではない。

- ①神の性質がそれを許さないからである。
- ②神は、悪に誘惑されることのない方である。
- ③神は、悪とは無関係であり、悪を経験したことのないお方である。
- ④それゆえ、人を誘惑するようなこともない。
 - * 神は私たちの信仰をテストされるが、罪を犯すように誘惑することはない。
- ⑤ただし、誰かが他の人に誘惑を仕かけることはお許しになる場合がある。
 - * ヨブ記では、サタンがヨブを誘惑することを、神はお許しになった。
- ⑥問題は、人の内側にある。

(3) 人が誘惑されるステップがある。

- ①人の内側に「欲」というものがある。これ自体は問題ではない。
- ②その「欲」におびき寄せられることが誘惑となる。
 - * 「欲」とは魚を釣り上げるための「餌」である。
 - * 人間は、習慣的に「欲」によっておびき寄せられている。

- *従って、常に靈的に目を覚ましている必要がある。
- ③誘惑に乗ることに同意した瞬間、「欲」がはらみ、罪を生む。
 - *ここでは、出産のときのイメージが使われている。
- ④誕生した「罪」は、そのままにしておくといくら成長する。
 - *罪の処理は、できるだけ早いうちに行うのがよい。
 - *罪の処理は、悔い改めと告白によって行う（1ヨハ1:9）。
 - *これは、クリスチャンに与えられた祝福であり、特権である。
- ⑤成長した罪は、やがて「死」を生む。
 - *「欲」は、「罪」の母であり、「死」の祖母である。
 - *この「死」は、信者にとっては肉体的死、未信者にとっては永遠の死である。

8. 16節

16 愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。

- (1) 「愛する兄弟たち」と呼びかけている。
 - ①ヤコブは、信者に宛ててこの手紙を書いている。
- (2) 「だまされないようにしなさい」の意味は、2つある。
 - ①誘惑に会ったとき、「神によって誘惑された」と言うてはならない。
 - ②悪魔、他の人々、置かれた環境、幼児体験などのせいにしてはいけない。
- (3) 人が誘惑に会って罪を犯すのは、その人自身に責任がある。
 - ①「人はそれぞれ自分自身の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです」
 - ②すべては自分に責任があることを認めるところから、悔い改めが始まる。

9. 17節

17 すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。父には移り変わりや、移り行く影はありません。

- (1) すべての良いものは天から下って来る。
 - ①「すべての良い贈り物」と「すべての完全な賜物」は、神から下る。
 - *良いものは途切れることなく、今も天から下り続けている。
 - *その筆頭にあるのが、「知恵」である。
 - *クリスチャンは、日々それらを受けて生きている。

- (2) ヤコブは神を「光を造られた父」と呼んでいる。
- ①神は、「光の父（創造者）」である。
 - ②太陽や星には満ち欠けがあるが、神には移り変わりや、移り行く影はない。
 - ③このようなわけで、神が人を誘惑することは不可能なのである。

10. 18 節

¹⁸ 父はみこころのままに、真理の**ことば**をもって私たちをお生みになりました。私たちを、いわば被造物の**初穂**にするためなのです。

- (1) 「試練」と「誘惑」というテーマが、18 節を締めくくりとして終わる。
- ①この節は、「イエスを信じた者の立場」について語っている。
- (2) 「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます」(15 節)
- ①それとは対照的に、父は私たちをお生みになられた。
 - ②私たちが霊的に新生したのは、父なる神による。
 - ③私たちが新生することは、父なる神が熱心に願われた結果である。
 - ④自分の努力によってではなく、神がくださったことのゆえに救われた。
 - ⑤新生もまた、父から下る良い贈り物のひとつである。
 - ⑥神が私たちを救う方法は、「真理の**ことば**」によってである。
 - * それは、福音のメッセージのことである。
 - * 福音を受け入れる（信じる）というのが、私たちの側の責任である。
- (3) 「私たちを、いわば被造物の初穂にするためなのです」
- ①「私たち」とは、この手紙の読者とヤコブを含む言葉である。
 - ②「被造物」とは、霊的な新生を体験する信者たちのことである。
 - ③「初穂」とは、ユダヤ人信者たちのことである。
 - * 「初穂」があるということは、それに続く収穫があるということである。
 - * 将来救われるユダヤ人信者も異邦人信者も、ともに祝福の中に含まれている。

C. みことばを聞くことと、実行すること (1:19～27)

1. 19～20 節

19 愛する兄弟たち。あなたがたはそのことを知っているのです。しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。

20 人の怒りは、神の義を実現するものではありません。

(1) 「被造物の初穂」となるための教えが、語られる。

①神のことばにどう応答するかで、その人の信仰の成長が決まる。

②ヤコブは、信者ならずで知っていることについて触れようとしている。

* 「あなたがたはそのことを知っているのです」(新改訳)

* 「このことを知っておきなさい」(口語訳)

(2) 「聞くには早く」

①神のことばが朗読される時、心を開いて、意欲的な姿勢で聞く。

②当時は、聖書を個人的に所有している人はいなかった。

③また、この手紙が書かれた当時は、新約聖書そのものが存在していなかった。

④信者は集会で朗読される神のことばや、口伝の教えに耳を傾けた。

⑤聖霊が教えやすい人になる。

(3) 「語るにはおそく」

①神のことばに、性急に反応してはならない。

②古代ギリシアの哲学者エピクテトスの言葉

* 「自然は人にひとつの舌と2つの耳を与えた」

③ソロモンの言葉

「自分の口を見張る者は自分のいのちを守り、くちびるを大きく開く者には滅びが来る
(箴 13:3)

(4) 「怒るにはおそいようにしなさい」

①神のことばが要求することについて、反発したり、怒ったりしてはならない。

②信仰のゴールは、「神の義」を獲得することである。

③人間の怒りは、それを実現するものではなく、むしろそれを遠ざけるものである。

④怒りと義が一致するのは、神だけである(マタ5:22、ロマ2:5参照)。

「怒りをおそくする者は勇士にまさり、自分の心を治める者は町を攻め取る者にまさる
(箴 16:32)

2. 21 節

21 ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、

すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。

- (1) 信者のもうひとつの義務は、「神のことばを受け入れる」ということである。
- ①この義務には2つの段階がある。
 - ②第1段階は否定的なもの、第2段階は肯定的なものである。
- (2) 第1段階は、「すべての汚れやあふれる悪を捨て去り」ということである。
- ①道徳的汚れ、神に喜ばれないものなどを捨て去るということである。
 - ②「捨て去り」は、「着物を脱ぎ捨てる」という意味にもなる（使7：58参照）。
- (3) 第2段階は、「心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい」。
- ①みことばが種に例えられている。
 - ②福音を受け入れた人は、みことばの種がその心に植えつけられた人である。
 - ③すでにその種は、その人の心の中で根を張り、成長しつつある。
 - ④種が成長し、実を付けるためには、みことばをすなおに受け入れる必要がある。
 - * 緊急性をもってそれを歓迎し、自分の生き方の中にそれを取り入れる。
 - * ベレヤのクリスチャンたちの例

「このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた」（使17：11）

- (4) 「みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます」
- ①この手紙の受け取り手たちは、すでに救われている。
 - ②ここでの救いとは、将来に起こる救い、つまり「救いの完成」のことである。
 - ③信じた者は、すでに救われていると同時に、その救いが完成する途上にある。

3. 22～24節

- ²² また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。
- ²³ みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。
- ²⁴ 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようなであったかを忘れてしまいます。

- (1) 「また、みことばを実行する人になりなさい」
- ①みことばを聞くことの次に、みことばの実行が来る。

②耳を傾けるだけで十分だと考えるなら、それは自分を欺いていることになる。

(2) 聞くだけの人は、「自分の生まれつきの顔を鏡で見ている人」のようである。

①当時の鏡は、銅や青銅を磨いた手鏡で、鮮明に顔を映し出すものではなかった。

②それでも、のぞいた人の顔を映し出すことはできた。

③その手鏡をのぞくと、自分の生まれつきの顔が見えた。

④しかし、鏡を置いたとたんに、自分の顔がどのようなであったか忘れてしまう。

⑤みことばによって自分の本当の姿を見せられても、すぐにそれを忘れてしまう。

⑥正すべき点があっても、それをそのままにして立ち去る。

4. 25 節

25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。

(1) みことばは、「完全な律法」、「自由の律法」である。

①これは、モーセの律法のことではなく、キリストの律法のことである。

②それは、完全で最終的な神からの啓示である。

③ユダヤ人にはモーセの律法からの解放をもたらす。

④また、すべての信者に罪と死からの解放をもたらす。

⑤みことばを実践するなら、自由が得られる。

「そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。『もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします』」(ヨハ 8 : 31 ~ 32)

(2) みことばの鏡は、私たちの罪や欠点を映し出す。

①その鏡を一心に見つめて離れない人は、みことばを実行する人になる。

②その人は、将来大いに祝されるようになる。

③その人は、岩の上に家を建てた人が受ける祝福を受ける (マタ 7 : 24 ~ 25)。

5. 26 ~ 27 節

26 自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなししいものです。

27 父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。

(1) 22～25節で述べられた真理の適用

- ①むなしい宗教と汚れのない宗教の違いとは何か。
- ②外側の形式だけを守っていても、それは真の宗教とは言えない。
 - *熱心に形式を行っても、自分の舌を管理していないなら、むなしい宗教である。
- ③「自分の舌にくつわをかけない」とは、舌が暴れ馬のようになっていること。
 - *ヘブル的で、絵画的な表現である。
- ④そのような人は、自分の心を欺いている。
 - *動詞が現在形なので、「欺き続けている」という意味になる。
- ⑤そのような宗教は、なんの実を付けることも、永遠の価値を生み出すこともない。

(2) 汚れのない宗教は、3つの特徴を持っている。

- ①汚れのない宗教を持っている人は、自分の舌を管理している。
- ②孤児や、やもめたちが困っているときに、世話をする。
 - *当時のユダヤ人共同体では、孤児とやもめが最も悲惨な状況に置かれていた。
 - *彼らは、貧困層の代表であった。
 - *みことばを実行する人は、不幸な境遇にある人たちを助ける。
- ③「この世から自分をきよく守ります」
 - *「この世」とは、ギリシア語で「コスモス」である。
 - *サタンによって支配された「暗やみの組織としての世」を指す。
 - *信者は、墮落したこの世の悪の影響から自分をきよく守ろうとする。
 - *これは、個人的な倫理、道徳の問題である。

(3) 私たちの信仰（宗教）は、むなしいものか、それとも汚れのないものか。

- ①舌の管理
- ②弱い者への思いやり
- ③きよい生活

MEMO

II. 憐れみに富んだ奉仕 (2章)

A. えこひいきの罪 (2:1~13)

1. 1節

2:1 私の兄弟たち。あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから、人をえこひいきしてはいけません。

(1) 「私の兄弟たち」

- ①この呼びかけは、新しいテーマに入ったことを示している。
- ②ここでの信仰のテストは、「社会的地位に基づいて人を評価するな」である。
*つまり、「人をえこひいきしてはいけません」ということである。
- ③モーセの律法は、社会的地位によって人をえこひいきすることを禁じている。

「不正な裁判をしてはならない。弱い者におもねり、また強い者にへつらってはならない。あなたの隣人を正しくさばかなければならない」(レビ 19:15)

- ④ヤコブは、それと同じ真理を新約時代の信者に適用している。

(2) 人をえこひいきしてはならない理由が2つある。

- ①信者は、福音を信じ、その信仰によって救われるという経験をした。
- ②その信仰の対象は、「栄光の主イエス・キリスト」である。

(3) 「主イエス・キリスト」の前に「栄光の」というタイトルが付けられている。

- ①「栄光」とは、シャカイナ・グローリー(神の栄光の輝き)のことである。
- ②イエス・キリストは、神の栄光を人類に啓示するために地上に来られた。
(ヨハ1:14、テト2:13、ヘブ1:3参照)
- ③ヤコブは、イエスが公生涯を歩んでいるときには信者にならなかった。
*彼には、イエスの内にあるシャカイナ・グローリーが見えていなかった。
- ④しかし、復活のイエスに出会ってからは、人生が一変した(1コリ15:7)。
- ⑤主イエスの栄光に触れた人は、人を恐れなくなり、えこひいきからも解放される。
- ⑥栄光の主の前では、すべての信者は「罪赦された罪人」に過ぎない。

2. 2～4節

- 2 あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、りっぱな服装をした人が入って来、またみすぼらしい服装をした貧しい人も入って来たとして。
- 3 あなたがたが、りっぱな服装をした人に目を留めて、「あなたは、こちらの良い席におすわりなさい」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこで立っていなさい。でなければ、私の足もとにすわりなさい」と言うとしたら、
- 4 あなたがたは、自分たちの中で差別を設け、悪い考え方で人をさばく者になったのではありませんか。

(1) えこひいきの具体例

- ①「会堂」とはユダヤ人の会堂の「シナゴグ」のことである。
*これは、正式な会堂での集会とも、一般的に信者が集まる集会とも取れる。
*ヤコブは、ユダヤ人信者を意識して、この言葉を用いている。
- ②会堂に金持ちが入って来たとする。
*指には金の指輪（複数）をはめ、輝く色の服を身に付けている。
*この服は、裕福な者たちが着ていたものである（ルカ 23：11 参照）。
- ③それに続いて、見るからにみすぼらしい服装をした人が入って来る。
- ④金持ちは歓迎され、最上の席に案内されるが、貧しい人は見下される。
*「あなたは、そこで立っていなさい。でなければ、私の足もとにすわりなさい」
- ⑤このように振る舞う信者は、神の御心を行っていると言えるだろうか。

(2) ヤコブはそのような行動を、罪として断罪する。

- ①それは、人を社会的地位によって差別する罪である。
- ②それは、自分を「裁き人」に任命するような愚かな行為である。
*しかも、神の基準によってではなく、人の「悪い考え方」で裁く罪である。
- ③ここでヤコブが取り上げている問題は、極めて現代的な問題でもある。
- ④神は、人の心をご覧になる方であることを思い起こそう。
- ⑤裕福な者は謙遜にされることを学ぼう。
- ⑥貧しい者は自分が福音によって高く引き上げられていることを感謝しよう。

3. 5～7節

- 5 よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。
- 6 それなのに、あなたがたは貧しい人を軽蔑したのです。あなたがたをしいたげるのは

富んだ人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。

7 あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名をけがすのも彼らではありませんか。

(1) 貧しい人に関する 3 つの事実

- ① 神が救いのために選ばれたのは、その大半が貧しい人たちである。
 - * 貧しい人を見下すことは、神が彼らに対して示された態度とは矛盾する。
- ② この世の貧しい人たちが選ばれたのは、信仰において富む者とされるためである。
 - * 彼らは、神の恵みという豊かさをこの世で味わう者となった。
 - * その豊かさは、この世のものではなく、キリストの中に隠されたものである。
- ③ 彼らは、「御国」を相続する者とされた。
 - * 「御国」とは、将来訪れるメシア的王国のことである。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」(マタ 5:3)

* 御国での地位は、地上生涯でどのようにキリストに仕えたかで決まる。

(2) 金持ちに関する 3 つの事実 (大半の金持ちに当てはまる)

- ① 彼らは、ユダヤ人信者を虐げている。
 - * 彼らには権力があるので、そのようなことができるのである。
- ② 彼らは、裁判の制度を悪用して、ユダヤ人信者を苦しめている。
- ③ 彼らは、主イエス・キリストの御名を冒瀆し、汚している。
 - * 信者を迫害するのは、まさにキリストの御名を汚すことでもある。

4. 8～9 節

8 もし、ほんとうにあなたがたが、聖書に従って、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という最高の律法を守るなら、あなたがたの行いはりっぱです。

9 しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。

(1) ヤコブは、最高の律法 (黄金律と呼ばれるもの) を定義する。

- ① 「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」
- ② ヤコブの頭にあったのは、十戒ではなく、レビ記 19:18 の規定である。

「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは【主】である」(レビ 19:18)

③主イエスもこの聖句を引用された（マコ 12：28～31）。

* イエスによれば、この命令はモーセの律法の中で 2 番目に重要なものである。

(2) もし人が、黄金律を実行しているなら、それは立派なことである。

①もし人をえこひいきしているなら、それは黄金律違反である。

②えこひいきは、それほど重大なことなのである。

5. 10～11 節

¹⁰ 律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。

¹¹ なぜなら、「姦淫してはならない」と言われた方は、「殺してはならない」とも言われたからです。そこで、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。

(1) えこひいきは、姦淫や殺人と同じように律法違反である。

①モーセの律法には 613 の命令が含まれている。

②たった一つの点でも違反したなら、その人は律法全体を破ったことになる。

*姦淫しなくても、人殺しをすれば、姦淫したのと同じことになる。

*その逆もまた真である。

③つまり、えこひいきをした時点で、その人は律法の全部に違反したことになる。

*えこひいきを軽々しく扱ってはならない。

(2) モーセの律法は、キリストの十字架の死によってすべて無効となった。

①新約時代は、それに代って「キリストの律法」が支配する時代である。

②この手紙が書かれた時点では、この真理はまだ全面的に啓示されていなかった。

③ユダヤ人信者の多くが、モーセの律法は有効に機能していると考えていた。

④それで、こういう書き方になっている。

6. 12～13 節

¹² 自由の律法によってさばかれる者らしく語り、またそのように行いなさい。

¹³ あわれみを示したことのない者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。

(1) 2つの勧告

①黄金律 (8 節) の背後にある原則は、「キリストの律法」の原則そのものである。

* 信者は、その原則に基づいて語るべきである。

②さらに、語るだけでなく、その原則に基づいて行動すべきである。

* ヤコブの手紙では、行動は信仰の現われである。

(2) 信者は将来、「自由の律法」によってさばかれるようになる。

①「自由の律法」とは「キリストの律法」のことである。

* それは、「聖霊によって心に書き記される愛の律法」である。

②このさばきは、死後にやって来る。

* これは「白い御座のさばき」(黙 20 : 11) ではない。

* 信者だけが受ける「キリストのさばきの座」でのさばき (2 コリ 5 : 10) である。

③このさばきは、「キリストの律法」に基づいて行われる。

④信者は、主からの栄誉を受けるために黄金律に基づいて語り、行動する。

* これが、清い生活への動機づけとなる。

(3) あわれみか、さばきか

①あわれみを示したことの無い者は、あわれみのないさばきを受ける。

* 隣人にあわれみを示すことは、自らのためにあわれみを勝ち取ることである。

* また、隣人をさばくことは、自らの身にさばきを招くことである。

②あわれみは、さばきに向かって勝ち誇る。

* 神はさばくことよりも、あわれみを示すことを願っておられる。

B. 行いのない信仰 (2 : 14 ~ 26)

1. 14 節

¹⁴ 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

(1) 1 章 22 節の原則

^{1:22} また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。

①この箇所では、再度この原則が取り上げられている。

②修辭的疑問文を用いて、行いのない信仰は役に立たないことを教えている。

(2) パウロとヤコブの立場の違い

- ①パウロは、律法の行いによって救われると教えるユダヤ主義者と戦っていた。
*パウロの強調点は、「人は信仰により、恵みによって救われる」ということ。
- ②ヤコブは、無律法主義と戦っていた。
*恵みによって救われた者は、いかなる道德律にも支配されないという教え
- ③パウロにとって「行い」とは、「律法を守り行う」ということ。
- ④ヤコブにとって「行い」とは、「愛と信仰に基づく善行」のこと。
- ⑤パウロの関心は、「救いの教理」を展開することにあつた。
- ⑥ヤコブの関心は、「実践的な側面」を教えることにあつた。
- ⑦パウロは救いの方方法について論じ、ヤコブは救われた証拠について論じている。
*両者は、矛盾しているのではなく、補完し合っている。

2. 15～17節

- 15 もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、
- 16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。
- 17 それと同じように、信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです。

(1) 死んだ信仰の例

- ①信仰の友が着る物がなく、食べ物もなく、苦しんでいる。
*これは、ヤコブにとっては仮定の質問ではなく現実的な問題であつた。
*エルサレムの教会は、実に貧しい状況下に置かれていた。
(使 4：35、6：1、11：29～30 参照)
- ②貧しい人を見た信仰者が、「安心して行きなさい」と言う。
*これは、当時普通に使われていた別れのあいさつ（マコ 5：34、使 16：36）。
- ③また、「暖かになり、十分に食べなさい」とも言う。
*しかし、実際には何も与えない。
- ④「もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう」
*これもまた修辭的疑問文である。

(2) 適用

- ①「それと同じように、信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです」
- ②慰めのことばを発するだけの人の信仰は、死んでいる。

- ③そのような死んだ信仰は、人を救う信仰ではない。
- ④主イエスは、信者を「地の塩」、「世の光」と定義しておられる（マタ 5：14～16）。

3. 18～20節

- 18 さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行いを持っています。行いのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行いによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」
- 19 あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。
- 20 ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰がむなしいことを知りたいと思いませんか。

(1) 行いのない信仰がむなしいものであることを示す第1の論証

- ①ふたりの人が、自分には信仰があると主張している。
- ②片方は、行いがないので、信仰があることを証明することができない。
- ③もう片方は、「自分に信仰があることを、行いによってあなたに見せてあげます」と言う。
- ④信仰と行いは、切り離すことができない。

(2) 第2の論証

- ①「神はおひとりだ」と信じるだけでは十分とは言えない。
 - * 唯一神信仰の告白は、申命記 6：4（シエマの朗詠）から取られたものであろう。
 - * 昔も今も、ユダヤ人たちはこの箇所を信仰告白として朗詠している。
- ②しかし、悪霊どもも「神はおひとりだ」と信じて、身震いしている。
（マコ 1：23～24、5：1～10、ルカ 8：26～33 参照）
- ③「神はおひとりだ」と信じていても、行いがなければ、むなしい信仰である。
- ④むなしい信仰は、利息を生まないお金、産物を生じることのない土地、また、実を付けない木のようなものである。

4. 21～24節

- 21 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたではありませんか。
- 22 あなたの見ておるとおり、彼の信仰は彼の行いとともに行ったのであり、信仰は行いによって全うされ、
- 23 そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた」という聖書のことが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。

24 人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。

(1) アブラハムの例

- ①「私たちの父アブラハム」は、ユダヤ人が昔も今も使っている慣用語である。
- ②ヤコブはユダヤ人として、ユダヤ人の読者にこの手紙を書いている。
- ③パウロもまた、同じ慣用語を使用している（ロマ 4：16～17、ガラ 3：7、29）。
- ④「… イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたではありませんか」
 - *これもまた、修辭的疑問文である。
 - *「そのとおりである」という答を想定した疑問文である。

(2) 創世記 15 章と 22 章

- ①アブラハムは、創世記 15 章で主を信じた。
 - *この時点で、彼は義とされた。
 - *「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（創 15：6）
- ②創世記 22 章に入ると、彼は息子のイサクをささげるようにとの命令を受けた。
 - *アブラハムは、救いに至る信仰を持っていることを、行いによって証明した。
 - *その結果、アブラハムは「神の友」と呼ばれるようになった。

5. 25～26 節

25 同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したため、その行いによって義と認められたではありませんか。

26 たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行いのない信仰は、死んでいるのです。

(1) 遊女ラハブの例

- ①生きた信仰の第 2 の例として、ヤコブは遊女ラハブを挙げる。
- ②「遊女ラハブ」とある。これは、救われる前の彼女の職業であった。
（ヨシ 2：1、6：17、22、25 参照）
- ③彼女は、イスラエル人のふたりのスパイを、神からの使者として受け入れた。
 - *彼女は、この信仰によって救われた。
- ④自分に生きた信仰があることを、スパイたちを助けることによって証明した。

(2) 26 節で、ヤコブは今までの議論をまとめている。

- ①「たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行いのない信仰は、死んでいるのです」

- ②肉体と魂を分離するなら、それは肉体の死をもたらす。
- ③それと同じように、信仰と行いを切り離すなら、それは死んだ信仰となる。

(3) 信仰と行いの関係

- ①行いは、信仰を持った結果出てくるもので、救いを受けるための条件ではない。
- ②もし行いが救いの条件であるなら、どこまで行っても救いの確信は持てない。
- ③聖書は、福音を信じることだけが救いの条件であると教えている。
 - *福音の内容は、「キリストが私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、3日目によりみがえったこと」(1 コリ 15:1~4)である。
- ④救われた後、信者はさまざまな形で自分の人生を生きる。
 - *イエス・キリストという土台の上に、金、銀、宝石などで建物を建てる人がいる。
 - *あるいは、木、草、わらなどで建てる人もいる(1 コリ 3:11~15)。
 - *各人の働きは、終わりの日に明らかになる。

MEMO

Ⅲ. 舌の管理 (3章)

A. 舌の制御 (3:1～12)

1. 1節

3:1 私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。

(1) 「私の兄弟たち」という言葉は、新しい区分が始まったことを示している。

- ① 3章でヤコブは、「舌の使用法」について詳細に語っている。
- ② このテーマはすでに1:19で取り上げられていた。

1:19 愛する兄弟たち。あなたがたはそのことを知っているのです。しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。

③ ヤコブは、舌を使用する職責の最初のものとして「教師の務め」を取り上げている。

(2) 教師になろうとする者への警告

- ① 「私たち教師」。彼が自分を教師のひとりで見做していたことは明白である。
- ② 教師の立場から、これから教師になろうとしている者に警告の言葉を発している。
- ③ 教師の務めを忠実に果たすためには、教える賜物がなければならない。
- ④ また、聖書を正しく釈義（解釈）するための訓練を受けていなければならない。
- ⑤ 賜物と訓練なくして教師になろうとするのは、無謀なことである。
- ⑥ 当時、多くの者たちが教師になりたがっていたようであるが、ヤコブはその傾向にブレーキをかけている。

(3) ここでいう「教える」とは公の場での教えを指す。

- ① 個人的に1対1で教えることは、すべての信者がすべきことである。
- ② 教師としての職責を求めることは、少数の人だけが為すべきことである。
- ③ その理由は、「教師は、格別きびしいさばきを受ける」からである。
- ④ このさばきは、「キリストのさばきの御座」で行われるものである。
- ⑤ 教師になりたいなら、その賜物が与えられているかどうか自己吟味すべきである。

- ⑥賜物がない領域で奉仕するのは、辛いことである。
- ⑦また結果的に、他の人たちを苦しめることになる。

2. 2 節

2 私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。

- (1) 私たちはみな、多くの点で失敗をする。
 - ①ヤコブは、自分のことも含めてこの箇所を書いている。
 - ②教師も多くの点で失敗する。
 - * 靈的成長を妨害するようにつまずきを経験する。
 - ③教師には一般信徒よりも失敗が少ないことが期待されるが、それでも失敗する。
 - ④務めを果たさなかったり、間違っただけをしたり、罪を犯したりすることである。
 - ⑤これらの失敗は致命的なものではないが、それでもその人の靈的成長を妨げる。
- (2) 特に頻繁に起こるものが、舌（ことば）の使用に関する失敗である。
 - ①ここでは主に、教師が語る教えや勧告のことばが問題になっている。
 - ②日常生活において一般信徒が発することばについても、同じことが言える。
- (3) ことばで失敗しない人は、「からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です」。
 - ①「完全な人」とは、靈的成熟という目標に達した人のことである。
 - ②ことばを制御できるというのは、信仰が生み出した成果である。
 - ③その人は、生活のあらゆる部分について自制できる状態になった。
 - ④その人は、教師として完成の域に到達したのである。
 - ⑤その人は、教えという領域において過ちを犯すことのなくなった人である。
- (4) ことばを制御できているかどうかは、自制心があるかどうかを試す試金石である。
 - ①自らのことばの使用法について自己吟味をしてみよう。
 - ②ことばを使う奉仕に就いている教師たちのために、とりなしの祈りを捧げよう。

3. 3～5 節 a

- 3 馬を御するために、くつわをその口かけると、馬のからだ全体を引き回すことができます。
- 4 また、船を見なさい。あのように大きな物が、強い風に押されているときでも、ごく

小さなかじによって、かじを取る人の思いどおりの所へ持って行かれるのです。

5a 同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。

(1) 舌の力を示すための例話①：馬とくつわ

- ①「くつわ」は馬を御するための道具である。
- ②正しい位置につけられた「くつわ」によって、人は馬を自由に操ることができる。
- ③馬にも意志はあるが、小さな「くつわ」でそれを制御できる。

(2) 舌の力を示すための例話②：船とかじ

- ①風に吹かれると船はある方向に流されて行く。
- ②そのままにしておくと、船は自然界の力（風）によって追い立てられる。
- ③しかし、いかに巨大な船であっても、小さなかじを操作することによって、思いどおりの方向に動かすことができるようになる。

(3) 舌もまた、「くつわ」や「かじ」と同じである。

- ①舌はからだの中では小さな器官であるが、人生を動かすほどの力を持っている。
- ②舌は自慢したり、傲慢なことばを吐いたり、他人を批判したりしながら、私たちの人生を墮落へと追い込んで行く。
- ③しかし、舌を正しく用いるなら、私たちは霊的成長へと進み、神からの栄誉を受けることができるようになる。
- ④もし舌の使用法を間違えば、私たちは神のさばき（訓練）に遭い、神からの栄誉を逃すことになる。

4. 5b～6節

5b ご覧なさい。あのように小さい火があのような大きい森を燃やします。

6 舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、からだ全体を汚し、人生の車輪を焼き、そしてゲヘナの火によって焼かれます。

(1) 舌の力を示すための例話③：森の火災

- ①森の火災は、小さい火が原因となって起こることが多い。
- ②小さな原因が大きな結果をもたらすという真理が、ここでも実証されている。

(2) 3つの例話の適用

- ①「舌は火であり、不義の世界です」
- ②放置されたままの舌には、火のような破壊的な力がある。
- ③この世（コスモス）は神によって創造されたが、今はサタンの支配下に置かれており、その

本質は邪悪なものである。

- ④からだの器官の中で世界（コスモス）の邪悪さを体現しているのが、舌である。
- ⑤舌ほど邪悪なことが起こる原因を作る器官は、ほかにはない。
- ⑥そういう意味で、舌は特別な器官なのである。

(3) この世（コスモス）は、神に敵対する価値観に基づいて動いている。

- ①私たちの内に宿っている神に敵対する価値観は、舌を通して外に表現される。
- ②舌は私たちの内にある邪悪な思いを外に出し、それによってからだ全体を汚す。
- ③その結果、私たちの人生は破壊される。
- ④舌の邪悪さの源は、ゲヘナ（地獄）にある。
- ⑤舌はゲヘナの火によって焼かれる。

*舌の持つ破壊力：ナチの反ユダヤ主義的プロパガンダ、テロを扇動する演説

5. 7～8節

- 7 どのような種類の獣も鳥も、はうものも海の生き物も、人類によって制せられるし、すでに制せられています。
- 8 しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。

(1) ここでヤコブは、動物界に話を転じている。

- ①人間は、4種類の動物の性質を制することができる。
- ②創世記9：2に出て来る分類

「地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、」（創9：2、口語訳）

- ③4種類とは、獣（歩行する動物）、鳥（空を飛ぶ動物）、はうもの（地上をはう動物）、そして海の生き物（泳ぐ動物）である。
- ④人間の性質は、動物の性質よりも勝っている。

(2) 動物界を制しながら、舌を制御することはだれにもできない。

- ①「だれにもできない」とは、このことに関しては例外がないということである。
- ②舌は、放たれた動物のように、あちこち動き回り、じっとしていることがない。
- ③舌は死の毒に満ちている。

「彼らは蛇の毒のような毒を持ち、耳をふさぐ、耳の聞こえないコブラのよう」（詩篇

58 : 4)

(3) 人間に舌を制御する力がないのは、道徳的、靈的な理由からである。

- ①人間の意志は、罪のために弱体化させられている。
- ②舌を制御し、靈的な成熟に至るためには、新生体験と聖靈の助けが必要である。

6. 9～12節

- 9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。
- 10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。
- 11 泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。
- 12 私の兄弟たち。いちじくの木がオリーブの実をならせたり、ぶどうの木がいちじくの実をならせたりするようなことは、できることでしょうか。塩水が甘い水を出すこともできないことです。

(1) 舌は一貫性のないものである。

- ①私たちは舌をもって、「主であり父である方」をたたえる。
 - * 神を「主であり父である方」と呼ぶのは、きわめて新約的な呼び方である。
 - * 「主」とは権威を強調したことば、「父」とは愛とあわれみを強調したことば。
- ②私たちは同じ舌をもって、人をのろう。
 - * 神のかたちに創造された人をのろうのは、創造主である神をのろうのと同じ。
- ③「私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません」

(2) 自然界は一貫している。

- ①最初の例が、泉である。
 - * 「甘い水」は飲用に適した水、「苦い水」は飲めない水。
 - * 同じ泉から、2種類の水が湧き出すことはない。
- ②次の例が、果樹である。
 - * いちじくの木がオリーブの実をならせたり、ぶどうの木がいちじくの実をならせたりすることはない。
- ③自然界に生息するものは、自然の法則に従って活動し、一貫している。
- ④しかし、舌はそうではない。
 - * 舌の二面性こそ、私たちの性質の二面性を証明するものである。

B. 上からの知恵 (3 : 13 ~ 18)

1. 13 節

13 あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか。その人は、その知恵にふさわしい柔和な行いを、良い生き方によって示しなさい。

(1) 知恵の証明

- ①舌を管理するために知恵が必要であるが、知恵はどのようにして証明されるのか。
- ②ヤコブ 2 : 14 ~ 26 は、「真の信仰は行いによって証明される」と教えていた。
- ③知恵もそれと同じで、行いによって初めて証明されるものである。
- ④知恵とは実際的な問題を解決し、自らの行動を選び取っていく判断力のこと。
- ⑤それは、神から与えられるものである。

15 あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。

(2) 具体的な行動

- ①知恵は「柔和な行い」によって示されるものである。
- ②知恵ある人の行動は、傲慢やでしゃばった態度の対極にある。
- ③ギリシヤ的定義では、知恵とは抽象的な知識の蓄積を言うが、ヤコブはそういう意味ではなく、ヘブル的な意味で知恵という言葉を用いている。
- ④ヘブル的な意味での知恵とは、現実的、かつ道徳的な洞察力のことを言う。
- ⑤そのような知恵は、神と神のことばを知ることから生まれてくるものである。
- ⑥私たちの周りには、知識はあっても知恵のない生き方をしている人が多くいる。
- ⑦聖書研究の目的は、まだ知らない真理を発見し、それを実生活に生かすことである。

2. 14 ~ 16 節

14 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってははいけません。真理に逆らって偽ることになります。

15 そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。

16 ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。

(1) 偽りの知恵（地上の知恵）には、3つの特長がある。

① 苦いねたみ

* 他人の成功や幸福に対して、厳しい態度を示すこと

② 敵対心（分派を起こす傾向）

* 利己的な野心を持つこと、不道徳な方法で自分の目的を達成しようとする事

* その原因は、心の中にある。

③ 誇る事

* 「真理」に逆らって誇る事

* 「真理」とは「福音」のことである。

* キリストの福音を受け入れたなら、十字架以外に誇りとするものがなくなる。

(2) 偽りの知恵は、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものもある。

① 地とは、「この世（コスモス）」のことである。

② 肉とは「墮落した人間の性質」のことである。

「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです」(1 コリ 2：14)

③ 悪霊とは、「サタンの支配下にある墮落した天使たち」のことである。

④ 「この世」、「肉」、「悪霊」の3つは、霊的戦いの3つの敵である。

(3) 偽りの知恵は何をもたらすか。

① 「秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがある」

② 偽りの知恵をもたらす根本的な原因は、制御されていない舌である。

3. 17～18節

¹⁷ しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。

¹⁸ 義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。

(1) 真の知恵（天からの知恵）の7つの特長

① 純真

* 「清い」、「汚れがない」、「この世の知恵で汚されていない」という意味である。

* これは、心の中の状態を指すことばである。

*内面が、外側の行為となって現われる。

- ②平和
- ③寛容
- ④温順
- ⑤あわれみと良い実とに満ち
- ⑥えこひいきがなく
- ⑦見せかけのないもの

(2) 偽りの知恵がもたらす結果と、真の知恵がもたらす結果は対照的である。

- ①永続性のある実は、神からの知恵を持っている人によってしか達成されない。
- ②この世の知恵によって行動している人は、必ず挫折し、崩壊する。

IV. 悔い改めを伴った従順 (4章)

A. 世的生活への警告 (4:1 ~ 12)

1. 1節

^{4:1} 何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。

(1) 争いの原因

- ① 「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか」
- ② この質問は、信者の間に争いや憎しみが存在していたことを暗示している。
 - * しかもそれは、継続している争いであった。
 - * ヤコブは、そのことを感じていた (知っていた)。
 - * 信者間の争いに対して、ヤコブは怒りを覚えている。
 - * 「兄弟たち」という呼びかけの言葉が、ここには出て来ない。
- ③ 次にヤコブは、修辭的疑問文の形で自らの問いに答える。
 - * 「あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか」
 - * 「からだの中で戦う欲望」とは、罪の性質のことである。

2. 2～3節

² あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをします。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりします。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。

³ 願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。

(1) 世的な信者がたどる 4つの段階

- ① ほしがっても自分のものにならない。
 - * 自己愛から出た欲望が満たされない状態
- ② 自分のものにならないので、人殺しをする。
 - * 心の中で人を憎んだり、怒ったりすることも殺人に当たる (マタ 5:21 ~ 22)。

- ③うらやんでも手に入れることができない。
*さらに抑圧が増した状態になる。
- ④その結果、争ったり、戦ったりするようになる。

(2) 受けられない理由が2つある。

- ①神に願わないから

「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。父には移り変わりや、移り行く影はありません」(ヤコ1:17)

- ②願っても受けられないのは、悪い動機で願うから。

「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるといふこと、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るので」(1ヨハ5:14~15)

3. 4~5節

- 4 貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。
- 5 それとも、「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる」という聖書のことばが、無意味だと思うのですか。

(1) 「貞操のない人たち」

- ①「兄弟たち」という呼びかけとは対極にある呼びかけである。
- ②これは、偶像礼拝を霊的姦淫と捉える旧約聖書の考え方から出た言葉である。
- ③神を第一として生きていない信者は、「貞操のない人」である。

(2) 「世」(コスモス)とは、神に敵対する考え方、体系のことである。

- ①クリスチャンは、神に仕えながら、同時に世を友とすることはできない。
- ②「世を愛することは神に敵すること」だからである。
- ③世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵にしているのである。

「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません」(1ヨハ2:15)

(3) ヤコブ 4 : 5 は、この手紙の中で最も難解な聖句である。

- ①「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる」
*旧約聖書からの直接的引用ではなく、要約的引用である。
- ②この文は、別の訳が可能である。
*「神が私たちのうちに住ませた御霊は、ねたむほどに私たちが慕い求めておられる」
- ③私たちはイエスをキリスト（救い主）と信じたときに、内に聖霊をいただいた。
- ④その聖霊は、私たちが愛しておられる。
- ⑤私たちが世の友となるなら、聖霊はねたむほどに私たちが慕い求めてくださる。

4. 6～10節

- 6 しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」
- 7 ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。
- 8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。
- 9 あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。
- 10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。

(1) 「さらに豊かな恵み」を得るための7つの勧告

- ①へりくだること
*箴言 3 : 34 の引用。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる」
*高ぶる者は、自分が恵みを必要としていることに気づいていない。
- ②神に従うこと
*神に従う者が踏み出すべき第一歩は、罪の告白である（1ヨハ 1 : 9）。
- ③悪魔に立ち向かうこと
*悪魔は私たちが糾弾する者である。
*悪魔に勝利する秘訣は、「立ち向かうこと」にある。
*信仰によって悪魔に立ち向かう者には、勝利が約束されている。
*1ペテロ 5 : 8、エペソ 6 : 10～18 参照
- ④神に近づくこと
*神に近づくとは、神に向かって決定的にUターン（方向転換）すること。
*このことばは、「神を礼拝する」とも訳せる。
*私たちが神に近づいただけ、神は私たちに近づいてくださる。
- ⑤手を洗い清めること

- * 「罪ある人たち」とは、信者の中で罪を犯している人たちへの呼びかけである。
- * 典型的なヘブル的対句法が使われている。
- * 「手を洗い清めなさい」とは、外面的な行動を正すこと。
- * 「心を清くしなさい」とは、内面的な悔い改めを行うこと。
- * 信者でありながら罪の中にとどまっている人は、「二心の人たち」である。

⑥ 苦しみ、悲しみ、泣くこと

- * 自らの罪のゆえに苦しみ、悲しみ、泣くこと。
- * マタイ 5：4 参照

⑦ 最後に、再びへりくだることの重要性が語られている。

- * 主が、私たちを高くしてくださる。

6. 11～12 節

- 11 兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。
- 12 律法を定め、さばきを行う方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすこともできます。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。

(1) 「兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません」

- ① この禁止令から、信者の中に他の信者の悪口を言う者がかなりいたことが分かる。
- ② しかも、それが日常化していた。

(2) 悪口を言ってはいけない理由が 2 つ上げられている。

- ① 兄弟の悪口を言う者は、律法の悪口を言っているのである。
 - * ここでいう「律法」とは、モーセの律法のことではない。
 - * 原文には、定冠詞が付いていない。
 - * この律法は、1：25 に出て来た「完全な律法」「自由の律法」のことである。
 - * 「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という黄金律のこと（2：8 参照）。
- ② 隣人の悪口を言うのは、神に属する権威を行使していることになる。
 - * 神には、人をさばく権威がある。

B. 明日に関する大言壮語（4：13～17）

1. 13～14 節

- 13 聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう」と言う人たち。
- 14 あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません。

(1) 高ぶりの罪

- ①信者でありながら高ぶった生活をしているなら、それは罪である。

「あすのことを誇るな。一日のうちに何が起こるか、あなたは知らないからだ」(箴 27:1)

- ②ある商人が商売の計画を立てている。
- ③彼の罪は、自分の将来は自分の思いどおりになると思っている点にある。
- ④しかも彼は、習慣的にそのような行動をくり返している。
- ⑤彼の問題は、神を除外して自分の将来の計画を立てている点にある。
- ⑥その背後にあるのは、傲慢と高ぶりである。

2. 15～17節

- 15 むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」
- 16 ところがこのとおり、あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。そのような高ぶりは、すべて悪いことです。
- 17 こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です。

(1) 「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう」

- ①この言葉は、単なるおまじないではなく、心の姿勢の表現である。
- ②信者は、自分のいのちが露のようにはかないものであることを認めるべきである。
- ③主の導きに従いながら将来の計画を立て、予期せぬことが起こっても動揺せずに柔軟に計画の変更を行う。
- ④紀元70年のエルサレム陥落で、ユダヤ人たちは生活の変更を余儀なくされた。

(2) 信者の罪

- ①神の主権を無視して、むなしい誇りをもって高ぶっている信者がいる。
- ②そのような人は「なすべき正しいことを知っていながら行わない人」である。
- ③なすべきことを知りながら行わないのは、罪である。

- ④聖書研究の目的は、神の御心を知り、それを行うことである。
 - *私は、神が感じておられるように感じているだろうか。
 - *私は、神が私に見せようとしておられることを見ているだろうか。
 - *私は、神が私に聞かせようとしておられることを聞いているだろうか。
 - *私は、神が私にさせようとしておられることを行っているだろうか。
- ⑤美の基準、道徳の規準について考えてみよう。
 - *神が評価する芸術か。
 - *神が喜ばれるライフスタイルか（性的少数者、LGBT）。

V. 配慮ある分かち合い (5章)

A. 金持ちへの警告 (5:1～6)

1. 1節

5:1 聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲惨を思って泣き叫びなさい。

(1) 「金持ちたち」

- ① 「兄弟たち」ではなく、「金持ちたち」という呼びかけ
 - * 2:6～7に、裕福なパリサイ人やサドカイ人たちが出ていた。
 - * 彼らは、富を蓄積するだけで、それを愛の実践のために用いようとする。
- ② ヤコブは、彼らの傲慢の罪を、旧約の預言者のような厳しい口調で断罪している。
 - * 4章の終わりに出て来た勧告は、5章に持ち込まれている。
- ③ 彼らの上には悲惨な出来事が迫っている。
 - * 紀元70年に起こるエルサレム陥落のこと
 - * それを思い、彼らは泣き叫ぶべきである。

2. 2～6節

- 2 あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、
- 3 あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえませんでした。
- 4 見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。そして、取り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。
- 5 あなたがたは、地上でぜいたくに暮らし、快樂にふけり、殺される日にあたって自分の心を太らせました。
- 6 あなたがたは、正しい人を罪に定めて、殺しました。彼はあなたがたに抵抗しません。

(1) 彼らの富は腐っており、着物は虫に食われており、金銀にはさびが来ている。

- ① これら三つの動詞は、ギリシヤ語の完了形（ヘブル語の預言的完了形に匹敵する）。

- ②ヤコブの目には、すでにそのさばきは成就したかのように見えている。
- ③自分のために蓄えた富が、さばきを受ける証拠となる。
 - *富そのものが悪いわけではない。
 - *その富を、意味あることのために用いなかったことが問題である。

(2) 金持ちの罪の内容

- ①畑で働く労働者たちへの賃金を払っていない。
 - *労働者たちは日雇いなので、賃金を毎日受け取らないと飢えてしまう。
 - *未払い賃金が叫んでいる。
 - *労働者たちの叫び声が、万軍の主の耳に届いている。
 - *「万軍の主」は、旧約聖書に出て来る神の御名の一つである。
 - *異邦人には理解できない言葉である。
 - *ヤコブが、ユダヤ人の未信者に向けてこの箇所を書いていることが分かる。
- ②彼らの生活は、屠殺の日が近いことも知らず、自分を太らせている家畜に似ている。
- ③彼らは、正しい人を罪に定めて殺した。
 - *「正しい人」とは、彼らが迫害したユダヤ人信者のことであろう。
 - *ユダヤ人信者たちは、イエスの教えと模範に従って、抵抗しようとはしなかった。

B. 苦難と忍耐 (5:7～12)

1. 7～9節

7 こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。

8 あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。

9 兄弟たち。互いにつぶやき合ってははいけません。さばかれないためです。見なさい。さばきの主が、戸口のところに立っておられます。

- (1) 「こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい」
 - ①「忍耐」は、この手紙全体を貫くテーマである (1:2～4 参照)。
 - ②信者は、いかなる迫害や苦難の中にあっても、忍耐を働かせるべきである。
 - ③「主が来られる時」(パルーシア) は目前に迫っているから。
- (2) 「主が来られる時」とは、地上再臨の時ではなく、携挙の時を指す。
 - ①その時、信者を苦しめていたいっさいのものが取り去られる。
 - ②当時の信者たちは、携挙は近いという緊張感と希望を持って生きていた。
 - ③今も、「主が来られる時」は近いという真理は、変わらない。

(3) 農夫の例

- ①聖書の地では、秋の雨と春の雨は極めて重要なものである。
- ②秋の雨によって作物は芽を出し、春の雨によって実が熟す。
- ③農夫は、豊かな収穫を得るために、神の介入を忍耐深く待つ。

(4) 忍耐を働かせるべき分野のひとつが、「ことばの管理」である。

- ①「兄弟たち。互いにつぶやき合ってははいけません。さばかれないためです」
- ②信者同士の間で批判したり、不平を言ったりすることのないように注意すべき。
- ③やがて主のさばきの前に立つことを思うなら、不満をぶつけ合うことはなくなる。

2. 10～11節

- ¹⁰ 苦難と忍耐については、兄弟たち、主の御名によって語った預言者たちを模範にしてください。
- ¹¹ 見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさったことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。

(1) 苦難と忍耐については、主の御名によって語った預言者たちが模範となる。

- ①主イエスもまたこう語っておられる。

「喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです」(マタ 5:12)

(2) 最後にヤコブは、ヨブの忍耐を例に上げている。

- ①ヨブは苦難の後に、肉体的、物質的的祝福を受けた。
- ②それ以上に素晴らしかったのは、神を「慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方」として知ったことである。

3. 12節

- ¹² 私の兄弟たちよ。何よりもまず、誓わないようにしてください。天をさしても地をさしても、そのほかの何をさしてもです。ただ、「はい」を「はい」、「いいえ」を「いいえ」としなさい。それは、あなたがたが、さばきに会わないためです。

- (1) 「私の兄弟たちよ。何よりもまず、誓わないようにしなさい」
- ① 「何よりもまず」は、次に出て来る教えが最も重要であることを示している。
 - ② その教えとは、「誓わないようにしなさい」ということである。
 - ③ 当時のパリサイ人たちが犯していた罪に対する警告である（マタ5：33～37参照）。
 - ④ 天を指して誓うとは、神の御名を口にして誓うことである。
 - ⑤ 地を指して誓うとは、地にある何か聖なるものを指して誓うことである。
 - ⑥ そのほかの何かを指して誓うとは、ほかの聖なるものを指して誓うことである。
 - ⑦ 神の御名を軽々しく扱ったり、汚したりすることのないようにということである。
 - ⑧ 何かをさして誓う理由は、その人自身のことばに信頼性がないからである。
 - ⑨ 信頼性があれば、誓う必要はなくなる。
- (2) 「はい」と「いいえ」
- ① 信者は、「はい」を「はい」、「いいえ」を「いいえ」とだけ言えばよい。
 - ② その人の言葉に信頼性があるなら、性急に誓うようなことはする必要がなくなる。
 - ③ 誓いの禁止は、「主が来られる時」が近いことを前提に語られている命令である。
 - ④ 自分が語るすべての言葉について主のさばきがある。

C. 信仰の祈り（5：13～20）

1. 13節

13 あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。喜んでいる人がいますか。その人は賛美しなさい。

- (1) 「主が来られる時」を待ちながら生活している私たちには、祈りが不可欠となる。
- ① 「苦しんでいる」とは、さまざまな逆境の中で苦しむことである。
 - ② その場合の最もふさわしい応答は、祈りである。
 - ③ 「喜んでいる」とは、霊的、精神的に充実した状態にあることである。
 - ④ その場合の最もふさわしい応答は、賛美である。

2. 14～16節

14 あなたがたのうちに病気の人がありますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。

15 信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。

16 ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。

(1) 「あなたがたのうちに病気の人がありますか」

- ① その場合の最もふさわしい応答は、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらうことである。
- ② ヤコブは、ここで初めて「教会」という言葉を使っている。
- ③ 教会とは、信者の共同体のことである。
* 当時は、教会は複数の指導者（長老）たちによって導かれていた。

(2) この命令は、文脈に注意して解釈する必要がある。

- ① 病気の人が、自ら行動を起こして、長老たちを自宅に招く。
- ② 長老たちは、その人のために主の御名によって祈る。
- ③ その際、オリーブ油を塗る。
- ④ しかし、祈りに答えてくださるのは神であることを覚える必要がある。
- ⑤ 罪が病気の原因になっている場合は（1 コリ 11：30～32 参照）、病人は長老たちにその罪を告白する必要がある。
- ⑥ そうするなら、その人の病気は癒され、罪は赦される。
- ⑦ その病気が肉体的な不調や弱さなどから来ている場合は、癒されるかどうかは、主の御手の中にある。

3. 17～18 節

17 エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。

18 そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を実らせました。

(1) 最後にヤコブは、「義人の祈り」の例としてエリヤを上げている。

- ① エリヤは、私たちと同じような弱さを持った人であった。
- ② そのエリヤの祈りは、雨をとどめたり、降らせたりすることができた。
- ③ 「義人」とは、神のことばを実行する人のことである。

4. 19～20 節

19 私の兄弟たち。あなたがたのうちに、真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を連れ戻すようなことがあれば、

20 罪人を迷いの道から引き戻す者は、罪人のたましいを死から救い出し、また、多くの罪をおおうのだということを、あなたがたは知っていなさい。

- (1) ヤコブは、信仰生活の上で起こってくる誤解や過ちを正そうとしてきた。
 - ①最後に彼は、自分がしているのと同じことを、読者がするようにと勧めている。

- (2) 「真理から迷い出た者」
 - ①教理的な間違いを犯している者
 - ②その結果、福音の真理からも、主イエスからも離れてしまった者
 - ③道徳的に墮落した者
 - *福音の真理から外れると、必ず道徳的な墮落が始まる。
 - ④ユダヤ教に回帰した者
 - *福音の真理から離れたユダヤ人たちは、ユダヤ教に回帰して行った。

- (3) 「その人を連れ戻す人」
 - ①真理から迷い出た罪人を、迷いの道から引き戻す人
 - ②その人は、罪人のたましいを死から救い出す。
 - ③ここでの死とは、肉体的な死のことである。
 - *肉体の死を招くような罪がある（1 コリ 5：5、11：30、1ヨハ 5：16～17 参照）。
 - ④「死から救う」とは、その人自身がそうするというのではなく、主イエスが働かれるための器として用いられるということである。
 - ⑤「多くの罪をおおう」とは、その人の罪ではなく、彼が引き戻した罪人の罪である。



無断複製・転載を禁じます